



Title	碩園先生の面影（四篇）
Author(s)	
Citation	懐徳. 1925, 2, p. 6-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

碩園先生の面影

碩園先生世を去り給ひて、早や四月餘りの月日は過ぎぬ。遺し置き給ひし文の草々取り出でて讀みゆくに、ありし日の御俤眼に逼りて追慕の情いよ、切なるを覺ゆ。老嫗物語を繕きてはその至孝に感じ、朝鮮甲午陣序を讀みては、友愛の至情に涙得止めず、水戸游記には師に奉じ給ふ恭しきを偲び、南島偉功傳には舊主を思ひ給ふ強き誠に心勇みぬ。嗚呼先生のわが懷徳堂の廢滅を慨きて、再興を畫し給ひしも、書を著して道義を説き給ひしも、皆此心の發露に外ならじ。先生の文章を知るものは藻思天授といひ、先生の爲人を知るものは光風霽月といふ。まことに中れり。然れども人倫の間に處して、その情かくの如く純に、かくの如く厚かりしを知らざれば、未だ眞に先生を知るといふべからず。今四篇を抄録してこゝに掲ぐ。我等の至らぬ心もて、徒に先生の行事を論せんよりは、親しく先生の筆に接して、讀者のその至情に觸れ給はんことを欲すればなり。

老嫗物語（むかしがたり）

予が母方の祖母君は、若かりける時より文よみ歌を作ることを好みて、朝な夕な敷島の道の葉をたづね言葉の林に分け入り玉ひけるものから、浮世の事しげくて思ふまゝに風流の道にわふけり玉はざりけるが、年老ひ玉ひては心にかゝる雲もなく、眞氏の築かせ玉ひし鷗川のほとりなる養老の臺に限なき月を弄び清き流に心を洗ひ、只管言葉の花にあこがれ玉ひけり。子孫多き中にも、予が三歳にして父に別れ母の手に人となりて世にも頼り少きを、いとく隣み玉ひて日比のいつくしみ深く、曲れる背に負ひ、折れし膝に抱き、哺めつ、舐りつ、劬勞大方ならず、殊に性得虚弱にして虫氣とやらんを病み、命さへ危ふかりけるを兎角して撫育み人並に生立せ玉ひけり。予れ七つ八にもなりければ疾くく、と叱りて師の許に通學せしめ、師の許より歸れば授かりし文を復習

せしめ、よく覺つる日はほめたゝへ、忘れつる日は繰返し、教へ玉ひき。元より物語草紙どもを好み玉ひければ五月雨の徒然には内外の孫を膝近くあつめて曾我兄弟の古を物語り、極月の月ものすごき夕には赤穂四十七士の故事を語り出て、或時は保元平治の物語を讀み聞かせて、清盛のやうに相手を嫌ふは男に非ず、八郎御曹子こそ猛くいさましかりけれ、道に背きし人は義朝のやうによからぬ名を残すものぞかしなど云ひさとし、或時は諸國の名所圖繪を取出でて此處はなにがしの功名を顯はしし古跡なり、彼處こそ誰の名歌をよみいで玉ひし名所なれ、と一々繪を示して古事を説き玉ひしは、指を偲ふれば早十年餘りの昔なりけり。十六の年母君のゆるしを得て故郷を立出で物學にとて東の都に上りてよりは空飛ぶ雁の傳言に惹ましまさぬを知り、水莖の跡に俤をしのぶのみ、折ふし草々の物語文を繕きては過し夜半の物語りを思出で、故郷に歸りし思をなしたりしが、一昨年夏初めて浪華に僑居し、去年の夏の初めつかた母君を迎へまゐらせし時は、限なき喜と共に深き悲をさへ引起しぬ。初め子が故郷を立出で

し時は祖母君こそ鬢にも雪を戴き玉ひしが、母君は其時四十一、切棄玉ひし黒髪猶つやゝかなりしに、十一年ばかりは昨日今日と思ひの外早や鬢の邊霜斑に御顔の肉も落ちさせ玉ふを見まゐらせて凌雲の額をかきて一夜の中に髮眞白になりけん。古人にはあらねども、年月の御心盡しさこそと推圖られて涙止めあへず、其につけても五十路の上一つ二つ越ねさせ玉ひし母君すら此の如し。まして祖母君は胸安からず、何は扱置きて安否を問ひまゐらせしに、母君はいさうれしげに祖母君の御健に渡らせ玉へばこそわらはも斯く旅衣を着たれ、去年の憲法發布式には御年已に八十七、上より養老の黄金を賜ひければ祖母君

和田原八十島こゆる年波の

かひある御代に逢ひにける哉

とよみ玉ひて、數ならぬ賤の媼も君が恵にもれぬこそうれしけれ、斯くてはいつまでも生きてやは、と眷族姻戚を集へて盃をめぐらし玉ひき。わらは我子の顔見まほしさに舟路遙けく旅立たんにも、年老ひ玉ひし祖母君の事心にかゝりて後髪をひかれしに祖母

君はなかなか別を惜み玉ふけしきもなくて

子を思ふ心の駒に鞭たば

浪の千里も安く越わまし

と口すさみ玉ひき、と語らせ玉ふを聞きて、老人は身も心も強きものかなど打笑ひまゐらせぬ、斯くて家弟も東より浪華に來りしかば、三處に別れたりし親子三人一つ處に團欒して家の中にみちみちたる春風に熱をも忘れ、或時は月の前に端居して幼かりし時の物語に夜の更くるを覺へず、或時は親子手を引て浪華の名所を見めぐり、さかくして二月ばかりも過ぎぬるうち、故郷よりおそろしき消息あり、祖母君御心地例ならねば歸れとなり。母君はまして、一家舉りて胸を驚かし朝夕の食も咽を下らず、子と妻といそぎ母君を伴ひまゐらせて直に船を買ひ、日數經て故郷に着き、旅衣もね更へで、疾く走りて鷗川の別莊に赴き、門口より如何にや如何にと尋ぬれば、病は早や怠り玉ひぬ、と云ふに夢の覺めたらん心地しぬ。祖母君は聲聞きつけてまろび出で玉ひ、扱は消息に驚されて歸りつるか、折々送りし寫眞には見まさりて丈高く肉つきて天晴よき男になりける

よな、孫婦は御身か、見まほしうてく夢のみ通ひしに、うれしや今日は、よき曾孫早く見せ玉へかし、御身も此此のうれしさに年月の心盡も忘れつらん、など宣ひて他事なう子と妻との顔見つめ玉ふに、母君はうれし涙せきかね玉ふ風情なり。見まゐらすれば祖母君の髪雪を欺き、面の年波堆く齒落ちて頬回み、腰は曲りて弓のやうなれども氣象は昔に變らせ玉はず、御物語まめやかなるに心や、落居て失ひし寶を得し心地しぬ。是より十日ばかりの間は絶えず訪づれて笑ひのゝしり、此處にも春風吹渡りぬ。此の別莊は鷗川の清き流に臨みて高く岸の上に築きたり、東には天神橋を隔て、白銀の岡を望み、前には城の濱の一里ばかりも眞白に磨けるを見る、城の濱の東茂り合へる松原の中に白壁幽に見ゆるは日傳の祠なり、里人船路を禱るとかや。濱の西に盡くる處に二三十戸の村あり、蟹泊と云ふ。森の中に見わつかくれつ蓬の窓柴の扉指もて數ふべし。村の西に岩いくつどもなく海中に突出でたるを箱崎と云ふ。此の樓より望めば龍の海に飲むに似たり、砂は白く松は青く、藻鹽焚く烟はおぼろに花かど見ゆ、岸打つ

波の響靜かに松吹く風に通ひて、漁の歌千鳥の聲おのづから律呂を合せしものゝ如し。誠に此處は薩摩鴻沖の小島の須磨明石なりけり。或夜此高樓に子孫數多打集ひつゝ酒酌みかはしゝ夜は、月白銀の岡の彼方に昇りて海原遙すみ渡り、松の影さへおかしく濱邊のけしき得も言はず、仙郷とは斯る處をや云ふらん。祖母君の世に稀なる壽を保ち玉ふも宜なりこそ思はれしが、祖母君子にこちらへと傍近く召して盃を賜ひ、此の種子島は霜置かぬ南の海に豆の一粒浮びたるいと小さしとはいへども、文學古より開けて多く文人學者を出しゝは世の人の知る所なり今こそは女も字を知らぬはなけれど、古は何處も分きて此國などは女の學問を無用の事と思へるもの多かりければ、種子島も女にして物學べるはいと少かりしかども、歌よまぬ女なきは世にもいと珍らしかるべし。古の女流にして其行其歌など語り傳へて幼きものゝ教へ草どもなすべきものなきにあらねどいまだ文にもせし事なければ世に傳らぬぞ口惜しき、我れ若き比より聞傳へ今も女孫又は近き邊の少女御等に物語りて聞する女流の話種々あり、今宵物

語りて聞せん、御身筆取りてよとおほするに、此はいと有難くこそいへ、去らば筆にもしのひはんほどに、語りて聞せ玉へ、人々もよく聞覺わ玉へと云ひて燈を挑くれば、生の子等孫等老も幼きもにじり寄りて祖母君の膝下に團欒しぬ。

甲午朝鮮陣之序

嵐に散りし去年の花は、來ん春に又も咲かなん。雲隠れにし夜半の月は、晴なん時に再びさやけからまし。一たび逝きて返らぬは、亡き人の上ぞ知るものから、猶うつせみのまぼろしの世こそ恨めしけれ。賤の緒環いくたびか繰返しても其甲斐あらねど此の悔言はで已み難きを如何にせん。吾兄弟の先人は、少きより文學を修め、且つ韜鈴の家なりければ、兵學をも究め、夙に江戸に上りて、宕陰鹽谷大人の門に學び玉ひけるが、天道の吝なる、之に年を假し玉ばず、御年二十七と云ふに、熱病にかゝりて、残り玉ひき。其時子は生れて三歳、吾弟は猶母君の御腹にこもり居て、三月ばかりを経てこそ生れけれ。如何に母君の御心細うおわしましけめ、同じ道にもと

嘆かせ玉ひけれど、亡人の遺兒に心ひかれて、男々しくも思ひ切らせ玉ひし黒髪の、一すぢに亂れじと誓ひて、内外の事を一人していそしみわきまへつゝ、吾兄弟の五つ七つにもなりし比より、師の許へたのみて、文よみ物かく事を習はせ玉ひ、いさゝか怠ればいつも先人の御靈の前に引ずゑて、いと嚴にこらしさとし玉へりき。幼き時は唯畏しとのみ思ひしが、やう／＼年長くるまゝに、予も吾弟も、母君の訓身にしみて、先人の名をおささじといそしみつ、予は十六の時に、吾弟は十八の年に、東京に遊學し、先人の友垣にたよりて業を修め、年月を越えていさゝか物の理をも知りしは誠に教師の賜と母君の訓とにぞ因れりける。其後兄弟家を同うして母君を大阪に迎へまゐらせ、もろともに文かく業に日を送るやうになりては、花晨月夕、榻を同うして酒を酌み、夜雨青燈、床を連ねて書を讀み、母君の御前に先人の御事を承りては、予は吾弟を、吾弟は予を、其面影と思ひて、曾我殿原の昔をも偲び、又或時は兄弟國事を論うて、言葉烈しく言ひ争ふを、いつも母君の吾弟を先づ制し玉ふに、果は擧りて笑ひ興じ、親も

子も、兄も弟も、世は只いつまでも斯くてあるべきものゝやうに思ひて、頓て如何にせまし、斯らんこそよかんめれ、なご行末の事ども誓ひしこそ、誠に果敢なき夢なりけれ。去年の夏の初めつかた、朝鮮國の内亂より日清の事起り、我朝日新聞社より視察員を遣さんことゝなりしが、吾弟は斯くと聞きて、いでや國にも報い名をも擧げんは此時なりとて渡韓を請ふこと切なりしも朝鮮へは予を、馬關へは吾弟を派出せんことゝなりしかば、兄弟もろともに家の宗祖に御暇乞して、大阪を船出し、馬關にて袂を分ちしは去年の六月十五日なりき。頓て戦起りしかば予は一たび歸朝せしに吾弟も馬關より歸りて大阪に在り、いさましげに出迎へて、兄君よ某も此度朝鮮に渡らんことになり候ふて、日比の望叶ひ侍りぬと云ふに、其はいとめでたしとて、彼の地の有さまをも詳かに物語りしが、門出の日ともなりぬれば、勇み進みて船に上れりき。是れ偏に父母の名をも擧げ君國の恩にも報いまつらんと思ひてなりけり。斯くて予も平壤の第一軍に従はんとて、秋の初つかた朝鮮國仁川に着きしに、吾弟は京城より馬にて下り來つ。

八重の汐路を隔てし旅の宿に、兄弟手を握りて酒酌交せし樂、いつの世にかは忘らるべき。子も吾弟も、打ほゝゑめるのみ。言葉は少くて盡の數は重り、此の夜は枕を並べて同じ宿に故郷の母君を夢みまゐらせ、幼かりし昔に返りし心地せしが、其翌日平壤さして御用船に上らんとする時、吾弟の人々と共に小舟にて見送り、互に再會を誓ひて月尾島の沖合に別を告げしぞ今生の暇乞なりける。

悔しや、悲しや、天涯相逢ひし樂はうたかたの消わた跡なく、幽明の別、呼べど返らず、俛のみぞ残れる。二月あまりを越えて吾弟の病めりと聞わしは、子が戦地より歸りて病を大阪に養ふ折なりしが、大方ならず打驚きしも、人にはまさりて健なる吾弟の、昨日今日身まかるべしとは夢にだに思はず。且つ天道もし是ならば、吾母君の二十八に寡婦と爲り玉ひしより、誠をこめて生ふし立て玉ひたる二本の撫子の實をも結ばぬに、争で一本をだに枯らし玉ふべき、と思ひて神々にねぎまつりしに、翌くる日はいとすみやかなりと聞わしかば、夢とも分かず、現とも分かず、親しき人々にたのみて一人の看護婦を雇ひ、

彼の地へやらんとしたりし日即ち十二月三日と云ふに、遂にゆゝしき音信は聞へき。肉もどけ骨も碎けたらんやうに、力落ちて、物も覺えず。人々の弔らふにやゝ心定りて涙も落つめり。嗚呼人の命は神の力にも及ばせ玉はぬにや

愚にも天地の神をうらむかな

おもひもかけぬけふのわかれに

と覺はずもよばひき。時に母君は平山太孺人の御病を看護りまゐらせんとて、去年の春の初より故郷に歸りておわせしが、太孺人は終に十一月十四日になんうせさせ玉へるにと聞わしに、今又此の訃を聞かせ玉はば、御悲みは如何ならんと、胸も碎けんばかりなれども、さて終にかくしまつるべきにあらねば、門人に消息もたせて故郷に下しつ。やがて歸り登りしに、御有さまは如何にと問へば、子を思ふ闇に迷ふ親心、絶入らせ玉はざらんやうなれども、道に人目を憚らせ玉ひ、合戦の最中なれば哀は我のみかは、戦の場にこそ臨まね、御國の爲に散りにし撫子の花の香は世々に殘らん、とて男々しう思召しあきらめさせ玉へるやうなりしものから、人なき折はひれふ

して嘆き玉ふらんと覺しく、御袂はひちまさりて見
 ねまゐらせぬと云ふ。御返事にも同じやうなること
 かゝせ玉ひて其端に

親と子にわかれし袖にあまりつる

けふの涙をいかにしてまし

となん書付け玉へるに、物も得言はず打ふしたりき。
 やがて遺骸は揚花鎮と云ふ處の野邊の畑と爲し、遺
 骨をば社員堀田氏奉じて歸りませしを、神戸に迎へ
 て

世にあらば手をにぎりつゝほゝゑみて

たび路のうさをどはましものを

どうめきしも女々しや。朝日新聞社は其が國の爲に
 はた職の爲に斃れしを悼みて社葬の禮を備へて阿倍
 野の丘に葬りき。事のさまいと嚴なりしぞ悲の中の
 思出なりける。翌春予れ故郷に歸りて母君に省ねま
 つりし時ほご悲しかりしはなかりき。吾弟はいまだ
 妻をだにめごらざりしかば、子の一人もなきより宗
 族時三の二男時人として、年十二になれるを養ふて吾
 弟の嗣と爲し、亡人の寫眞の御前に盃を酌みて涙な
 がらに千代万代を祝ほざしこそ二なく哀なりけれ。

斯くて母君を伴ひまゐらせて大阪にのぼり着きて、
 初めてもろとも阿倍野の墓に詣でし時、また悲は
 新まれりき。是より花落つる夕、雁なき渡る晨、在
 りし世の事ども語り出でゝは打泣くめり。語り出で
 ゝ打泣けば、やゝ感むるよすがとなるも、あやしき
 心の迷なりけり。程なく日清の戦も治りぬ。兵も凱
 旋しぬ。吾弟の友垣の戦地より歸れるも多し。折ふ
 し中の秋の月影さやけかりし夜、母君と端居して眺
 めやりつゝ

壯士凱旋着錦衣

吾兒吾弟曷時歸

忽逢良夜增新恨

皎月生憎照慈闈

と小聲に口吟みしも、折に觸れ物に感じて、己み難
 き骨肉の情ぞかし。嗚呼先人の記念は天地の間に只
 吾弟一人のみ。其の俤さへ其の氣象さへ、先人に似
 たりと母君の日比宣ひしに、いとごゆかしくたのも
 しかりつるに、今はた誰をか記念とは見ん。むかし
 王昭君は鏡を恨めりとかや。子は鏡に向ふ毎に、子
 が面影を先人とも吾弟とも見て、在りし世を偲ぶこ
 そ果敢なけれ。去りながら人誰か死なからん。死處
 を得るを貴しとこそ聞け。國事に周旋して命を異境

に殞すは、誠に大丈夫の面目とや云はん。吾弟も實に母君の宣ひし如く、戰の場にこそ臨まね、國の爲に外に出で、時疫に命を失ひしは陣歿の功と異らざるべし。まして勇み進みて彼の地に渡り、生死はかへりみざる所なりしをや。去れば身は揚花鎮の烟と消えて、骨は阿部野の土とむすこども、御靈は天に升りて先人に事へつゝ、家の榮御國の幸をや護らん。其を悲しみ嘆くは、理を知らぬなるべし。さてもひまゆく駒のあし早く、夏も去り秋も過ぎ、今年も冬の初と爲りて、彼のゆゝしき計聞へしは、昨日今日と思へりしに、今日は早や一年の月日満ちぬ。因りて家人は更なり、親しかりし友垣を集へて、一年の祭をいとなむにつけて、在りし世を偲ばん爲に、人々にも分ち、家の子々孫々にも傳へんとて、吾弟のものせし、甲午朝鮮陣を印刷しつ。其はしに悔の八千度繰返すも、甲斐なき業になん。

明治二十八年十二月三日

兄時彦涙ながらに識す

水戸游記

十日晴る。或人日光山に詣てんと豊山大人を誘ひしも日光よりは水戸にこそ、水戸は累代名公の遺蹟も多からんとて、心の雲は筑波嶺の彼方にかゝり給ふ氣色なりしか、おのれも十八九歳の時、學友萩野禮卿と一游せしことあれど、汽車の通ふやうになりし後はいまだ往きて見ざるより、争で諸共に一游せばやと思ひしが、事しげくて日を過しつ、今日は入梅の時節にも似て天氣よく、暇をさへ得たれば、好事魔多し、いざさらばとて、大人をさそひまゐらして出立つ、母君は路遠ければとて家に残り給ふ。

夏艸の上ならなくにしはしとて 宗成

別るゝ袖もつゆけかりけり
しばしとて別るゝ袖のぬれぬるは 淺子
言の葉におく露にそありける

午前九時半上野より汽車に乗る、大人鎌倉江島にも、多摩川の鮎狩にも、いつも母刀自と連立ちしものを、今日の旅路は只二人にてさびしくなりぬとおはせらるゝに、家に残りし人々も、此の二月はかりは片時も別れまゐらせねは、一日も年の如しと唧ちてこそ御歸を待つらめ、など語合ひてかへりみつゝ都

を出ぬ

このたひは君をのこして旅衣 宗成

うらさひしくもいつるけふ哉

一夜ねてかへらん旅も家人は 時彦

としのことしと我をまつらん

道灌山の下なる田端驛にて、汽車は首尾を倒置して東に向ふ、南北千住の間なる荒川の邊より見返れば、凌雲閣は半空に聳つて、依々人を送るに似たり、龜有驛を過ぎて中川を渡る、左手は平田渺々として、際なく、筑波嶺は始て半面を松林の上に露はしたり、金町と松戸との間なる流を西利根川と云ふ、のほる帆影、くたす筏いくつも見ゆ、此川は武總の境なりけり、松戸驛は利根川に臨みて家居うるはしく打續きたり、水陸の便開けし小都會なるへし、柏驛を過ぎて

右手の丘陵起伏せる間より湖光の溶々たるを見る、是なん手賀沼なりと云ふ、打繞らしたる青山翠壁の影を涵したる中に小舟さへ見わたり、大人に見せまゐらせんとて振向けは窓にもたれて假寝したまふに起しまゐらせず、東利根川は我孫子と取手との間に在り、河幅いと廣し、名にし負ふ坂東太郎の長流混

々として盡きず、遠山は淡く近山は緑にして、兩岸に相對しつゝ、或は開き或は闔ちたり、取手の上なる丘を城山と云ふ、天正中、大鹿左衛門と云ふもの、利根川に臨みて城を構へし險要なりけり、されは取手とは名けしにや

いにしへの取手はあれて利根川の 時彦

岸の浪こそ猶さわきけれ

鬼作左と呼はれし本多重次か墓も此の邊に在りと物に記しゝを見しかとも尋ねんやうなし、藤代と牛久との間なる小貝川は總常の境界なり、いと小さき流なりけり、牛久の沼を左手にしてゆく、沼の中に突出たる松林を初崎と云ふ、眺いとよし、此沼多く蓴菜を生すとぞ

ぬなはとる牛久の沼の朝きりも 宗成

晴れてすゝしき波の上かな

荒川沖と云ふ處を過くれは土浦なり、森々たる霞か浦を右手に見る、此處は湖の西に盡くる處にして、やうやう十の一二をこそ眺めらるれと、流石に鹽ならぬ海のみるめはるけく、聳ちたる峯は出て、磯と爲り、削りなしたる、崖は繞りて灣を成し、山容倒

に映して、水光天に連れり、岸邊には葭葦生ひ茂りて、小舟あまた繋きすてたり

蟹の子に身をかへてしもなかめまし 宗成

霞か浦のなつのよの月

左手は土浦の市街にして、土屋侯の舊城下なれば、人煙稍賑へり、市街の東なる丘は城址にもや、此の城は平將門の築きし所と云傳へたる、高望王の子にして姪將門の爲に討れし常陸大椽國香の御墓も此の邊に在りとなん、浦景色を眺めつゝ晝餐ものす、此の汽車の道は、常に筑波嶺と伴ひて離れず、或は北に眺め或は東に望み、其方角の變る毎に山の姿も亦變化して、招くか如く揖するか如く、故舊の打笑みつゝ來迎ふるが如くなりしか、土浦を過ぎてはやうく山に近き、男體女體の兩峯さやかに雲間に露はれ、二柱の大御神のかしこくも御姿を示し給ふに似たり、大人車上より遙に伏拜みつゝ祈願をこめ給ふは、舊主家の御上なるべし

筑波ねのこのもかのもに神まさは 宗成

我も御影をかけて祈らん

羽鳥岩間をも過ぎて友部に至る、奥州線の小山驛よ

り來る鐵道は、此處に濱街道線と接續するなりけり、内原赤塚を過ぎて、千波沼の岸邊傳ひに借樂園の下を走りつゝ、水戸の停車場に着きしは午後二時十五分なり、直に旅宿を求めんとは思ひしも、明日は入梅なれば雨とやららん、日は猶高ければ先つ遠き方よりこそ見めとて、午後二時五十分太田鐵道に乗る、佐竹氏の舊墟と水戸侯の舊城址との間に隧道あり、隧道を出れば那珂川なり、左手に顧みれば矢倉一つ残りて、茂り合へる老樹の上に白壁見ゆ、青柳下管谷上管谷額田を過れば久慈川の鐵橋なり、三時五十分太田に着く、人力車に乗りて瑞龍山を志す、車夫は皆五十餘なるか、常陸訛なれば、生國は何處ぞと問ふに、一人は武州川越、一人は肥前島原、一本の鎗をかち棒に代へて世を送るなりと云ふ

鎗の穂のすくなる道は世に合はて 時彦

めぐりくゝて車ひくらん

何處も今は早苗とる比にて、此邊の少女も賤の男の中に交りて、手業忙はしげに何やらん歌ふ聲も聞ゆ
足曳の山田の田子も大君の 宗成

みよをたゝへてうたはぬはなし

右は切倉道左は御山と記し、石標より、左に折れてゆく、路けはしこにはあらねども、夏艸に埋もれたり、且下り且上りてゆくほどに、やかて瑞龍山なり、太田より一里許もやあらん、山下に墓守の詰所あり、案内を請ひて御山に登る、山深く且高くして老樹天を掩ひ、神々しさ言ふはかりなし喘きつゝ磴を拾ひて、先づ最高處なる頼房公の墓に謁し、尋きて齊昭公の墓を拜す、崖を下り谷を渡りて、又も一森高き處に登りて光圀公の墓を拜む、塋域いと廣ければ盡く歴代の墓には詣てず、水戸侯は儒葬を用ひられ、謚號も墓制も、彼の國の風に遵はれけり、高く墓上に馬鬣封土饅頭を爲して、前に碑石を立たり、水をも花をも手向けす、子孫は香を燒きて肅拜するのみなりこそ、光圀公の墓下には壽藏の御位牌を納めし八角堂あり、西山より此處に移せしものとかや

いにしへの龍のあきこの玉ならて 宗成

玉をうつみし山やこの山

雲を起す龍の御山に登り來て 時彦

世々のいさをを仰くけふかな

朱舜水の墓は山の中腹の稍平なる處に在り、明徴

君子朱子墓と題したり、古來支那人の我國に歸化せしもの、方外の徒最多く文字を知れる者も尠からざりしかど、學徳並に高く、大節卓然たるは舜水に若くものなし、舜水明室の宗族を以て、國運の傾覆に遭ひ、絶域に流浪して、常に回復を思ひ、大勢の如何ともす可らざるに及びて、蹈海の節を全くし、名公の聘を受けて、雄藩の師と爲り、道を講し化を贊けし功は長く竹帛を照せり、其か長崎皓臺寺の廡下に、風雨をたに得凌かすして、空しく故國を望みけん時、門人安東省菴か俸祿の半を奉して之を養へる、誠に情誼に篤しと謂ふべく、舜水水戸に召されし後、省菴への贈遺、存問は、亦能く恩義に報ゆとや謂はん、當時師弟の辭讓を見るに、古道藹然として今の世の師道の闇を照すに足れり、誠に律義なる人なりけり、舜水老後郷信を得て、始めて其子の死を知り、其孫毓仁の來朝せし時は國禁の爲に其祖父を得尋ねず、舜水も亦年老いて西下相見る能はずして、空しく相望み相慕ひつる心根や如何なりけん哀とも云ん方なし、遂に異域に客死せしものから、生きては名公の寵遇比なく、死しては君家の塋域に葬られて千歳に

配祀せらる、亦瞑目するに足らんか、是より先き舜水學宮圖説を著はし、自ら模形を作りて世に傳へしか如きは有難き功業にして、後年湯島聖廟の再建には其模形を參考せしとかや、文集三十卷、門人光圀編輯と名をさへ記されて世に公にせられき、其文は楠公碑陰の記尤著はれて、文讀まんほこのもの知らぬはなし、おのれ日比慕ひつる人なれば、苦蒸したる墓前に跪きて、一首を手向けぬ。

君によりて文のはやしにさく花も 時彦

から紅のいろをましける

山を下りて西山艸廬を志さしてゆく、太田の此方なる馬場と云ふ處より、右に折れて細き小徑を傳ひゆけは、小川ありて橋をかけたたり、世に聞えし桃源橋とかや、堤上の桃の樹は多く枯れて、残るは十數株のみなり、橋の右手の圃中なる梅の老樹の下に、大なる石碑あり、往きて見るに字體磨滅して辨し易からず、やう／＼常州西山碑の篆額を讀得て、支族守山侯の立てし碑なるを知れり、猶ゆくに又一碑石あり、嘗て此地に令たりし人見氏の五言絶一首を記したり、左手の小道を傳ひゆく、右は丘、左は田にして、田

の上は松林なり、行くに隨ひて境漸く迫りつゝ、遂に蔚蒼たる、松林の中に分入りぬ、林中に池あり、池上に柴門あり、是れ光圀公の住給ひけん、西山艸廬なりけり、門を入りて右手の館守の家に案内を乞へば、五十はかりの女房出て、案内して、一覽せしむ、屋後をめぐりて庭中に出れば、寶庫あり、寶庫の前に心字の形の池あり、白蓮池と云ふ、庭中には飛石あり、自然の趣を旨として泉石を築かず、庭に烈公手植の松一本あり、此すら亭々として、雲を凌かんとするに、まして軒端の遺愛の梅は、老幹蟠屈して臥龍の姿あり、御住居にすへり入て見るに、床の間は八疊、御書院なるへし、次は十疊にして闕を設けず、此は隱遁の御身なれば、訪來人には打解けさせて上下の隔あらせしとたりきとかや、折ふしは里の父老を招きて、農耕の御物語とも遊はしきとなん、床には、東帶の畫像を掛けたり、水戸の常盤神社に納めつるを寫しゝものなりとぞ、眼光爛々として、犯す可らざる威嚴の眉宇の間に溢るゝを見る、像の上には公の眞筆を石版にしたるを掛けたり、小引に重陽日、酒泉氏訪予西山艸廬、既遠、心降、握手寒暖、

相共優游、詩彼酒此、官事無_レ監、速捶_二驪駒_一、孟冬初
 五、臨_レ別追餞、聊賦_二鄙詞九言_一、以代_二陽關三疊_一、と
 ありて其詩は邂逅相視垂_レ青兩懽然、談笑未_レ盡勿々
 促_二別筵_一、山圍水流共賞樂_二仁智_一、雨夜月夕對_レ酒試_二
 聖賢_一、勿_レ緩雁行常陽雲霞境、自_レ此寬望江東日暮天、
 子歸告_二史臣_一成_レ功何歲、歲不_レ待_レ人我去薦_二墓前_一、
 とあり、落款には西山と記されたり、文字の交、上下
 の隔なきを見るべく、常に心を修史に掛けさせられ
 しを知るに足れり、御書院より左手に見ゆるを觀月
 山と云ふ、月の此の山の端よりさし登るを眺めたま
 ひけん、今は松か枝空を掩ひて、月影を洩すへくもあ
 らす、昔は此の山より瀧三條流れ落ちけれども、今
 は涸れて音もなし、扱又御玄關を見るに僅に一間に
 過ぎすして、三尺の戸袋あり、人の出入は三尺に過ぎ
 す、御質素のほど誠にかしこし、奥庭に老梅あり、
 浪花の梅と云ふ、玄關より見やるに表門は柴を編み
 て戸と爲し、此戸を突上げ引下して閉閉するやうに
 なしたり、風雅言ふ可らず、抑光園公は庶子を以て頼
 房の後を承け給ひけるか、伯夷傳を讀みて謙讓の志
 を發し、御子は兄君の後を嗣かしめ、兄君の子を養

嗣と爲し、退隱して此處に栖み艸野山澤の隱士を學
 はれけり、中納言に進められ給ひし時

位山のほるもくるし老か身は

ふもこの里そすみよかりける

と詠して、自ら西山隱士、又は梅里先生と號せら
 れける、其儒術を崇ひ文學を奨め、心を濟世に留め
 て業を勧め民を安んじたまひし、御治績は更にも言
 はす、幕府の親藩を以て、王室を尊崇し、彼の僞儒
 林氏か撰ひけん本朝通鑑を上梓せんさせし時、其邪
 説を斥けて皇統の源を正し自ら正史を修めて大義名
 分を明にしたまひ、又楠公の碑を立て、忠義の氣を
 鼓舞したまへる、誠に千古の偉勳とこそ申しまつら
 め、功德の國に在ること斯の如きより、長く隱棲の草
 廬をたに保存して、訪來る人の跡絶ゆることなきは、
 召公の甘棠にもまされりとや云はまし、此廬既に朽
 ちしを、後に模造せしものなりとぞ。

君なくは清きなかれの五十鈴川

宗成

その水上をかきやにこさん

たま銚の道のしをりや西山の

やまふところに残しけるかな

位山よそに見すてし心こそ

時彦

あほけはたかきみさをなりけれ

みなと川しつみし玉も西山の

月としもにそあらはれにはる

しはし庭中を逍遙して、浮世の外なる峯の松風に心耳をすまして、いと昔ゆかしく、ゆきつもどりつ、歸路をさへ忘れしか、車夫の日の暮れなんとすと促すに、やう／＼辭して門を出てぬ、早や七時過ぎて、水戸に立返らん汽車なければ、此の夜は太田の銚子屋と云ふにやどりぬ、夕飯ものして螢見んとて若宮八幡の社の邊を散歩し、田の面を見渡しぬれど、身を焦す光は見て、このもかのもとに蛙の聲のみさわかし、宿に歸れば狭き室のいふせきさへあるに、樓上なる田舎客の酔ひしれて、宿の女を捉へて躍り狂ふ音の、蛙の聲よりもさわかしくて、しはしは寢られさりしか、終日汽車と人力車とに搖られて四十里はかりの路をあるきつれば、いと疲れて、いつまごろみしとも知らさりき。

十一日宿のくりやの方の水汲む音に目をさましつ、四つ時過る頃には起出てぬ、今日は入梅なれと降ら

ん氣色もなく、空よく晴れたり、急きて朝飯ものして、五時半の一番汽車に乗る、山には横雲、野には朝霧立こめて、心地すか／＼し、左手の並松原は岩城街道なりこそ、青柳の驛近くなりて右手に稍大なる池あり、拭ふか如き緑樹影を倒にして微風たに度らす、名を聞けば青柳の池なりと云ふ。

山姫のねくたれ髪やうつるらん

時彦

かけ緑なるあをやきの池

六時半水戸に着きて、直に偕樂園を訪ふ、停車場より程遠し、此の園は烈公（齊昭）の築かせ給ひし所にして今は公園と爲れり、園内に入れば幾千株とも知れぬ梅樹を植わたり、園隅に一大碑あり公の撰ひ且書きたまへる偕樂園記を刻みたる者なり、いと大なる殿造あり、樓下を好文亭と云ひ、樓を樂壽樓と云ふ、案内を請ふて樓に登る、樓下は即ち千波沼にして、櫻川は岸に沿ひて流れつゝ沼に入る、湖の山翠の屏風を引めくらしたるか如く水光山色、欄前に蕩漾せり、左を望めは筑波山の遙青座に入り、樓前の緑か岡は積翠檻に映して、其の名に負かす、此の岡は昔時義公の高枕亭淵明堂など設けられて、游息し

給ひし遺蹟なりと云ふ、扱て又庭中には萩躑躅多し、春秋の眺さこそ、庭前の崖には老松枝をかはし亭々として湖水にうつろへり、古は丹頂の鶴を湖中に放ち給ひしとかや、湖には七崎八澤と唱ふる勝景あり、湖中を横断せる長堤には、橋をさへ架けたり、彼杭州の西湖も斯くやと覺わつ、樓上の大觀は誠に拙き筆の及ぶ所にあらざりけり、天下の名園三あり、一は備前岡山の後樂園、一は加州金澤の兼六園にして、此の偕樂園も亦其一に居れり、おのれ兼六園には、過ぎし明治十八年夏中の放課に、重野述夫徠天行と共に北陸道に漫遊せし折、一たび足跡を印し、後樂園には同じき廿五年鐵眼禪師と同しく山陽道を上りし時に杖を曳きしことあり、盡く天下の名園を見たりしか中にも、觀の壯なる、規模の大なる、區々の人工を施さずして自然の名山水を園中の物と爲したる、此の偕樂園を以て第一と爲すへしと云へは、大人も人意の外なる絶景なりとて、餘念もなく眺め入りて坐を立んともしたまはず、歌は景色にけをされて出てすなりぬ、樓上の圓窓は大なる木の根をくりぬきたるなり、竹の柱は薩藩の順聖公より贈られしものなり

こそ、樓を下りて好文亭を一覽す、茶室あり、何陋庵と云ふ、結構すへて文雅を極めたるか、板戸に四聲の韻字を書し、假名遣の法を記して、詩つくり歌よまんものゝ便と爲したる、用意殊にめてたしとや云はん、庭中を見巡るに、老松の下に石の碁盤と將碁盤とを据わたり、去れば仙夾臺とそ名けたる、臺畔の茶店に憩ふ、園を見返り湖を見下すに景色得言はず、斯かる處に母君を伴ひまゐらせざりしことの口惜し

時彦

家へのこりし母をしそおもふ

園を出て、常盤神社に詣つ、義公烈公を合せ祀れる別格官幣社なり

よろつ代もうこかぬくにとなりける 宗成

きみか誠を礎にして

御社の名にしられけり御國をは 時彦

ときはかきはに守ります神

社の神樂殿にいご大なる陣太鼓あり、徑り四尺七寸五分、胴の圍り一丈五尺五寸、長さ六尺二寸、面に丸龍を畫き、胴には震天動地、起雲發風、三軍踊躍、進思盡忠と銘し、天保十二年辛丑冬十二月と記して、

烈公の印二顆あり、公の追鳥狩に用ひられしものにして、車にのせて曳きしとなり、彼の好文亭の樓上なる圓窓は、此の大鼓を作るに用ひし材木の切棄てしものなりとぞ。

雄心をうち起したるものゝふの 宗成

この鼓こそたかくきこゆれ

神樂殿の傍には、鐘をつふして鑄造ありし古砲をも備へつけたり、砲身いと大きく上に太極と題したり、轆をめぐらして弘道館に遊ぶ、藩士に文武を修練せしめんとて、烈公の建てられしものなり、門内には左に松を右に櫻を植ゑたり、寓意存するなるへし、玄關には遺書を陳しつ、講堂は今幼稚園と爲れるも縦覽を許せり、軒に游於藝の三大篆字を扁す、烈公の筆なり、講筵を設けられし座には弘道館記の撮本を掛けたり、奥の間には烈公の畫像を掛く、常盤神社に納めし木像を模寫せしものなり、其容温然たれども、何やら思ひに沈みたまへるさまなり、國運日に非なりし當時の御有様は斯くこそおはしけめ、長廊下は年始に書生に雁の羹を賜ひし處なりと云ふ、右には學文所左には講武所ありけれども、今は其建

物を毀ちて址のみ存せり、されども規模宏壯なりけん昔もおのつから想ひやらる、館後の庭中には、右に孔廟あり、左に鹿島神社を祭れり、其中央に鹿島の要石を模したる巨石ありて烈公の

行末もふみなたかへそ

鹿島大和の道を要なりける

と云ふ歌を刻したり、神道を本として儒教を敷かんとする學風自ら知られたり

千早振神代の道をたてにして 宗成

おりいたしたる唐にしきかな

鹿島神社の左手に堂あり、壁に八卦を刻めり、堂中には弘道館記の碑石を安置したり、石の色白くしてうるはしく極めて大なり、堂の軒に銃丸の痕あり、彼の書生黨と天狗黨との牆に鬨きし瑕なりけり、是れ水戸學風の弊の極まる所なりけんかし、園の一隅に半鐘あり、裏面に烈公の文を銘しつれども讀むを得ず、庭園の中は盡く皆梅樹なり、此處にも偕樂園にも、斯く數多の梅樹を植ゑさせられしは、獨其花を賞するのみに非ずして、其實を軍用に供し給はんことなりけり、我栖林公か太守に勸めて、紅葉をめ

てたまはんとならは櫛こそよけれ、其葉は紅葉し、
 其實は國益なりとて、櫛を多く櫻島に植ゑたまひけ
 んにも似たり、賢人の用意自ら符を合すが如し、大
 人と共に此處の知事柏田ぬしを訪ふ、其寓居は地高
 く境開けて、那珂川其下を流れ、遙に群山の起伏を
 望み、風景尤よし、柏田ぬし酒を侑めてもてなしい
 と厚し、やかて辭し去りて停車場に至る、大洗に游
 はんやと申せは、大人如何なる處ぞ、我宮崎蟹泊の
 邊にも似て、酒樓多く魚肉鮮なるのみを申せは、さら
 は、往かすもがな、早や歸らんどうなかし給ふより、
 一旅店に入りて、晝飯ものして、十二時廿八分汽車に
 乗る、昨夜は寝られずして疲れし上に、柏田ぬしに強
 ひられて酒には酔ひたり、汽車にゆられつゝ夢心地
 の中に幾驛をか打過ぎけん、大人も窓にもたれて例
 の假寐したまふさまなり。土浦にて涼しき浦風に目
 も覺めぬ、傀儡にやあらんと覺しき女を伴ひたる嫖
 客、同じ車に乗る、眼圓なる巡查のあやしけににら
 まへて見送りたる、いと物すこし、我孫子の里にて

さらぬたに我初孫の戀しきを 宗 成

我孫子の里に今日は來にけり

松戸の驛にて

たらちねの我を松戸のさどに來て

家路戀しく成にけるかな

飛鳥游に倦みけんとして、覺ぬすも相見て打笑ひぬ、
 五時過る頃上野に着き、車を急かせて赤坂なる氷川
 の森かけの艸廬に歸り着きしは六時半頃なり。家人
 とよめきつゝ出迎ふ、母君昨日も今日も天氣をのみ
 こそ祈りしか、五月雨のふりもせて、面白き旅路な
 らんなど想ひやりつゝ今朝よめりきとて

五月雨の空にしあれと昨日今日 淺 子

晴てのごけき旅路ならまし

けにものごけかりきとて旅中の事とも語り出るほど
 に、此文晝の頃まわりぬとて持て來るを、披き見れ
 は大山侯より南島偉功傳を九重の雲の上に傳獻しま
 つりしよししらせたまふにそありける、三たび押し
 たゞきて感涙留めあへず、艸莽微臣のものしつる文
 をさへ、乙夜の覽に備へたまふ大御代の、かしこし
 ども、辱しども、申さん言の葉たになし、抑一身の
 光榮は申すも更なり、舊君家の門地高く功業大なる
 事蹟は、今は雲井の上までも顯はれけんことこそ、

又なくうれしけれと云へば、大人を始め家に在りし人々こそりて、ことほき合へるに、旅の勞も忘れ果てつ祝の歌とも多く餘りにくたくしければ省きぬ

南嶋偉功傳の末節

其種子島氏發祥を尋ぬれば、則鎌倉に起り、其門地を問へば則平氏の正統を以て南海の小諸侯に封せられ、一變して附庸と爲り、再變して雄藩の一族に擬せられつゝ猶寶禮を失はず、以て先業を二十七世七百有餘年の久しきに持せし名門右族なり。地を開き業を勸めて、以て衣食を給し戸口を殖し、學を興し、教を敷きて、以て風を移し俗を易わて王化を宣布し、民を愛し、士を養ひて、以て、軍勞に服し武功を建て、以て、克く君國に報せし者は信基以下累代の功績を爲す。中に就きて時堯は則鐵砲製造の業を創し、以て文明利器の傳來を謀り、久基は則甘藷傳播の祖と爲りて、以て世を濟ひ民を救ひて飢餓に免れしめ、且つ夫れ南邊の要衝に居て外國交通の衝に當り、或は日明貿易の出入と爲り、或は日歐交通の起源を開き、或は力を外國船遭難の救助に盡して、以

て善隣の國交を助けし者淺少ならず。是れ實に種子島氏歴史の概要なり。嗚呼其功業德澤の國と民とに在る者亦大に且つ深からずや。

伏して惟ふに明治維新の後は、古來の名門右族と古今の功業德澤の大且つ深き者とを華族に列せられ、授くるに五等の爵を以して、皇室の藩屏となし玉へり。是に於て乎幽を闢き微を顯はし、廢を興し絶を嗣ぎ、名門の蓬華に沈淪する者、忽ち隆爵を賜ひ、潛徳の草莽に湮没する者、亦高位に叙せられ、一國一城の主より神官僧侶の徒に至るまで、恩光門戸に赫耀せり。嗚呼盛なる哉。蓋し武門政を執るに當りては、天子空しく虚器を擁し、名器官爵は、一に其の專濫に任して、恩を樹て柄を弄ぶの具に供せられしかば、苟名門右族の優遇すべき者ありとて、功業德澤の表彰すべき者ありとて、皇室は武門を憚りて爵位を與ふること能はず。以て其をして沈淪湮没せしむる者蓋久しかりき。王政維れ新なるに及びては大權古に復し、百事更張せり。是に於て乎名門の後を録して、功臣の裔を賞し、屈者始て伸び、潜者始て顯はれ、以て天下後世をして子々然として

明治の盛典美擧を謳歌せしむるに至れり。而して種子島氏の門地功德並に高きこと斯の如く、時堯久基の殊勳も亦大なること彼が如くにして、而も未だ皇家の恩典に浴せざるは何ぞや。豈其事蹟の湮没して顯はれざるが爲か。

近時維新の鴻業を翼賛せしを以て、新に授爵の典を拜せし者最多し。而かも是より先き未だ必しも維新の功あらずと雖、舊時小藩主小諸侯たりしが故を以て此榮を荷ひし者あり。唯名門の末右族の後たりしを以ての故に恩典に預りし者も、亦蓋し之なきに非ず。維新の功の外に、銃器改良、北地開墾等の功を

も録せられしことありとや。事固より 特旨に屬す。豈草莽の宜しく議すべき所ならんや。然れども嘗て私に種子島氏を以て彼に比するに、七百年來の名族にして壹萬石の舊封を終始領有したる諸侯は、世に其類なく草萊を開き教化を敷き、戸殖し家富みしは、古今の差こそあれ未だ必しも北海道開墾の功に劣らず。自ら開きし壹萬石を以て多數の家臣を養ひ以て國に盡したる軍役武功は、固より四五萬石の小城主に比して遜色なし。其累代心を外國交通に留

めて、善隣の誼を資けしか如きは、内地小諸侯の夢想だに及ばざる所にして、國交日に繁く、外艱月に急なる當今に在りては、帝國政府の忘る可からざる者にあらざるか。當時大發明に異ならざる鐵砲製造の創業は、今日の銃器改良に比して如何。久基の始て甘藷を獲て海内に傳播せしめて以て餓死を救ひし德澤は、殆んど其比を見ず。此に一あるも、以て特別の禮遇門戸の光輝を増して、天下後世を照すに足れり。況んや種子島氏は此の數者を兼有するをや。而かも今猶微々舊臣と伍して家格揚らず。蓋し其功績の世に顯はれざるが爲のみ。

恭しく思ふに 皇室の藩屏たるべき貴族は、卒伍より將相に上りて殊功偉勳を建てし人々は言を待たざれど、其他少くも歴史ある根據あらんには若かず。否らざれば樞花一朝の榮の如く、行潦蹄涔の水の如く、朝夕を待たずして衰へ、復た榮ゆべき根據あらずして、辱を先人に貽し、遂に禮遇を停めらるゝ者少しと爲さじ。歴史ある根據とは、其の家之舊くして且つ長く一地方を領して威望を持し、數多の家臣を養ひし者を云ふ。斯程の家たらんには舊君臣の情

義より自ら浹洽にして、舊主は、皇恩王化を舊臣に傳へ其殖産及び教育にも助力し、舊臣は舊主に化せられて、益奉公の忠勇を抽んで、一旦家道振はざるこゝあるに遇ふとも、舊臣の情義として力を戮せ心を協せて其中興を謀るべく、相依り相扶けて國に盡し君に報ひ、復た辱を貽し累を及すに至るまじ。斯くてこそ天壤と窮りなき、皇室の藩屏として憾なかるべし。種子島氏の如きも亦門地功業と共に此歴史ある根據の上に家道を維持せり。二十五代久尙の第二子を以て、兄時丸の早世したるが爲に其後を襲ひし守時は、七歳にして怙恃を喪ひ、骨肉盡く逝き、天地間犖々として依る所なき孤兒となれり。七百餘年來の情義を以て世々厥美を濟せる種子島の舊臣は斯く見て報恩の秋なりと爲し、奉じて舊領地に還り、二千餘の士族相議して、師傅一人と家從數人とを公選し、忠實公亮の徒をして之を保育せしめたりき。公選されし此人々は、朝な夕な此孤獨なる舊主の側に侍して、教育と家政の整理とに任せしが名門の後唯此の一塊肉あるのみなるに對して、男泣に泣く者あり。全島の士族は四時折々誠實なる見舞を怠らず、以て

十四五年の久しきに及び、今は居然たる偉丈夫に育あけつ、家道も亦振へり。亦忠厚の至ならずや。今や種子島氏は舊領土に居住して、尤力を舊子弟の教育に盡せり。而して舊領土の父老は、舊君家の家格の他に比して下れるを嘆きつゝ、思を雲井に馳せて、涙を草屋に注げり。嗚呼斯る根據を有する名門こそ世にも稀なんめれ。之を要するに斯る事蹟の埋もれて世に顯はれざればこそ、門地功德並に高く、且つ美るはしき歴史を有しながら、蓬華の下に沈淪して、禮遇を蒙るに至らざるものなるべけれ。先徳善あり、世に昭々たる能はざる者は後世の過なりと、鐵砲記にも云へり。因て潜徳の萬一を發揚せんとして、精確なる史料に據りて、累代治績の要を叙すること斯の如し。伏して惟みるに名門を禮遇し、功に報ひ勳を賞し、旌すに爵位を以して、天壤無窮の皇運を護する所以の者は誠に聖代の聖典なり。謹んで此に恩光の種子島氏に及ぶも亦當に遠からざるべきことを祈る。